

## No.19 六日知らず

ケチのことを「六日知らず」という。朔日、二日、・・・、五日と指を折るのは良いが、六日から指を開いていくのはせっかく得たものを手放すようでいやだという意味だ。そんな六日知らずの一家がうなぎ屋の隣に住んでいた。一家は、毎日、うなぎ屋が蒲焼を作り始めると食事をする。その煙と匂いで食事をするとおかずが要らなかったからである。

ある年の暮れにうなぎ屋の番頭がやってきた。

番頭：「えー、お宅に請求書を持参いたしました。」

亭主：「いや？何かの間違いじゃないの？うちじゃお宅のうなぎなんぞとんと食ったこたあねえよ。」

番頭：「いえ、お宅ではうちの蒲焼の匂いを吸われますので、タレを一回付けばいいところを二度三度とつけなくてはならないんで、その代金を頂きたいので、・・・。」

亭主：「そうかい、そう言われちゃあ払わなくちゃならねえね。おいくらで？」

番頭：「へい、一両五分ですんで。」

亭主：「高いねえ。まあ、仕方がねえ。おいおいお金を持っておいで。出来るだけ細かいのでね。さあさあ番頭さん、一両五分払いますよ」

番頭：「これはこれは、ありがとうございます。」

主人：「手を出すんじゃないよ。耳を貸しねえ。一両五分の音を聴かせるから。においの代金なんだから音で払えばいいんだ」